

嬉泉の新聞

- ・嬉泉の新聞／第44号／2000年（平成12年）10月発行（年3回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156-0055） TEL 03-3426-2323
ホームページアドレス <http://www2s.biglobe.ne.jp/~kisen/>
メールアドレス kisen@mxg.mesh.ne.jp
・発行人＝石井哲夫 ・編集人＝小山裕子

自閉症者の就労支援の在り方を考える

東京都立青鳥養護学校長 宮崎英憲

この夏、長年に渡って就労していた自閉症者で離職を余儀なくされたケースの相談を受けた。Aさんは、二十三年、Bさんは、八年もの間、同一企業に勤務していた。

Aさんは、真面目で言われたことは確実に対処でき、当該会社でも仕事の面ではさほど問題なく仕事をしていたようである。

Bさんは、感情の表現やコミュニケーション面で課題があった。従って、周囲の方との意思疎通が十分でなく、彼の意思をくみ取っていかうとする周囲の支援なしには、十分に成果が得られない状態であった。このBさんを支え続けたのは職場の課長さんだった。

こうしたAさん、Bさんが離職を余儀なくさせられたのは、結果的には、職場の人間関係に帰着する。

Aさんご自身は、仕事に対して、自信を持ち意欲的に仕事をしていた。ところが、職場の方々のAさんの評価には、ずれがあり同僚との付き合い方が一方的な対応となりがちで、最終的には、職場内で疎外され離職を余儀なくされていった。

Bさんの場合は、Bさんを支えてくれた課長さんの転勤をきっかけに職場内での彼の位置が変化し、ある事件をきっかけとして退職を勧告される事態に陥ってしまった。

この2件のケースの会社は、決して障害者雇用に無理解であるということではなく、むしろ評判の高い部類に属している会社である。

どうして、長年雇用が継続してきたものがこんなに簡単に駄目になってしまうのか、考えさせられてしまうケースである。

この2件のケースだけでなく、離職を余儀なくさせられているケースを見てみると、会社と個人との関係が微妙な関係になった時、当事者だけで処理をせざるを得ないという現在の企業就労の実態が明らかになってくる。

平成11、12年度の2か年にわたって全国特殊学校長会では、文部省の委託を受けて「障害者の新たな職域へ向けた職業教育等の調査研究」を実施した。1年次は、全国特殊学校を対象とした調査を実施した。雇用形態や環境、雇用業種が拡大・多様化していること等から、こうした状況に合わせて学校教育での柔軟な対応が求められている事が分かった。また、自閉症者の就労が、毎年150名を越えていること等も分かった。

2年次は、全国の約1,600社の企業を対象として、障害者雇用に際し、学校や関係機関に望むことについての調査を行った。

この中で、就労の継続のためには、学校への追指導（アフターケア）の期待が極めて高いこと等が分かった。各学校でも追指導の必要性を強く自覚しているものの追指導の期間としては、卒業後3～5年間程度に限っている学校が大多数であった。

このように、企業の強い追指導への期待と学校での追指導の限界の中で、卒業後の就労支援はどうあるべきかの調査も行った。

こうした就労実態の問題点の解決のため、障害者の雇用やその継続のため、会社と障害者の関係を調整し、雇用の拡大や雇用支援・生活支援をしていくシステムや第三者機関の設置の必要が改めて強く求められている。

■施設職員研修について思う

社会福祉の永遠の課題として、「サービスの向上」がある。このサービスの向上は、職員の資質に負うものである。そして、職員の資質とは、職員の心身の機能が適切に働くことである。社会福祉施設の現場に関わって四十年あまりになるが、片時も気が抜けずに次から次へと、新たな課題に挑戦してきている。しかしながら、いつでも質の高い良い職員に恵まれることを念願としてきた。社会福祉の世界では、職員の確保に関して、労働条件の向上と、研修の重要性をあげてきている。労働条件に関しては、多少の行き過ぎがあったと思われるような職員の労働条件をよくしてきている。今回のような東京都の公私格差是正費の減額が生じてきているのはその現れと言ってよいかも知れないが、このことは手厳しいことであった。本法人嬉泉において、他に先駆けて、年功給与からわずかではあるが、応能給与へ移行させてはいるが、残念ながら給与の財源全体のパイを減らされたのでは、とても、職員の奮起を促すがんばり賞までは出せずにいる。ある職員が入院す

るという事態になって、園長から、「この人は確実に他の人の二倍は働いていたことが分かった」という実感を込めた報告がなされた。その反面、誰から観ても半人前どころかその人がいることで責任を持つ人の手が取られてしまう人もいる。こういう人こそ研修で何とかならないものかと考えてきているが、心の入れ替え程度では追いつかないもののような気がしてな

のうわべのサービスに徹している組織は、非常によく分かるものがあるが、これに関しては、見識のある情報を流すことは極めてまれなことなのである。そのために長い間、専門と称する職場の様々な問題が摘発されてきた。例えば、学校や福祉施設の専門性に関わる理論が確定されていなかったことなどが、専門機関における体罰などのような不祥事を招いていた。

社会福祉援助論

(その七) 石井 哲夫

らない。ただ、同じパイの下でよい仕事や、質の高いサービスを求めるためには何らかの励みになるようなご褒美が必要ではなからうか。これは必ずしも、金銭的なものだけではなく真に専門性の高いジャッジメント(評価、判定)による荣誉が伴うものであることが望まれる。問題はこの専門性の部分であろう。我々の仲間内の評価では外向け(保護者や行政向け)

近頃は職員の研修もすすみ、長期にわたる事例検証も進んできたから、利用者本人の発言や親の会の評価などによる適正な評価が確定しつつあることを感じるが、それにしても現場で身を粉にして働いている勤勉な職員に対して報いる仕組みが出来ていないことを感じている。私が今まで行ってきた主観的な職員に対する評価も、それによって、荣誉としての主任補と

か、主任などという管理業務へと昇進できるようにしてきた。しかしこれは、荣誉には違いないが、責任はそれに伴って重くなってきた。ストレスが増すという仕組みで在るとすると、これまた問題といえよう。よく幹部職員が責任が重いことも忙しいことも結構だが、十年に一回ぐらいまとめて一ヶ月ぐらいリフレッシュできる機会が欲しいとばかり言われるが、私も本当にそうだと思っている。利用者の人間としてごく当たり前の生活を保障することが強調されるが、援助職員の専門的機能を高め、これを維持している努力に報いるためにも、この人達をリフレッシュできさるごく当たり前の人間としての暮らしをどう保証できるか、頭を悩ましている次第である。

これから始まる社会福祉基礎構造改革において、サービスの質的向上を第三者評価機関やオンブズマンや苦情処理機関などというシステム作りを矢継ぎ早に行おうとしているが、その間サービス機関の職員に関して、その質的向上を図る条件分析をきちんとやっておかなければならないと思っている次第である。

私たちの

うたと

須藤福祉センター各事業所からの報告

「新事業福祉活動センター よろこび」

子どもの生活研究所

小山 裕子

福祉活動センター『よろこび』は、今年度の4月から活動を開始した嬉泉で一番新しい事業である。現在、法人の大半の事業が措置施設になり、運営的な補助は得られなくなってきたが、自ずと足枷もでてくる。そこで、石井所長が法人設立の頃から描いていた福祉の多方面に亘る活動の原点を今の時代に合わせて実現していこうとしている（もちろん力不足なのでまだ十分ではないが）のが、この福祉活動センター『よろこび』である。

具体的には、次のような活動を始めたり、準備をしている。
*「啓蒙活動」：子育て・療育講座など、保育や療育、学習障害・

自閉症など発達障害への理解を深める専門講座を毎月1回のペースで開いている。7月の石井所長の『自閉症の心のケア』講座には、200名余りの人にお集まり頂けた。この後の予定としては、福祉施設の職員の方を対象にした『行動障害』の講座や自閉症のご兄弟を対象にした講座を予定している。
*ボランティアやサポーターの育成：理解の難しい自閉症の方をより分かるボランティアやサポーターの育成をすることで、家庭支援をしていきたいと考えている。それらに携わる方々の専門性を高める為に『自閉症援助サポーター認定証』の発行も予定

している。現在は、ベビージターのポピンズ・コーポレーションとの共同企画で、『自閉症対応シッター』の研修講座・実習を始めた。

また、利用者に直接関わるのではなく、施設のような活動を支える裏方の仕事もボランティアの方にお願ひし始めている。*オープン・スペース：先行き、自閉症・発達障害児者やその家族を対象にしたオープン・スペース『きららの泉（仮称）』を開催し、家族の交流や発達障害児者の楽しみや活動の場を提供していきたいと思っている。

このように、私たちがやりたいと思っても実行していなかったことを、今年度は「ともかく行動してみよう」と実際に行動していくと改めているいろいろなことを感じさせられる。

例えば、『地域』という言葉はよく使うが、実際、地元の千歳船橋の町会の催しや、まち作り協議会のフェアに参加してみると、地元の方々に私たちの仕事や自閉症の方のことをもっと伝えていく機会を作らなければならない、と痛切に感じる。『ボランティアの体験講座をすると、自閉症のこと

を知りたい、という方が思いの他たくさん集まる」「保護者の方が裏方の仕事のボランティアを、待っていましたと言わんばかりにお手伝いして下さる」「このような福祉に必要な活動に行政の支援が受けにくい現実」等々。

このように、もっとオープンにそして私たちの専門性を生かした福祉活動を広く確実に根付かせていきたいと強く思う。歩み始めた福祉活動センター『よろこび』の活動に、これからも長い目で皆様の心のこもったご支援をお願いしたい。



7月の福祉講座

職員の思い

今までを振り返って

星占いの天秤座の性質には『平等、平和主義…八方美人』などと書かれています。星占いなどは、当たるも八卦当たらぬも八卦ではありませんが、私自身の中には「その傾向はあるな」と多分に思い当たるどころがあり、そういう私が嬉泉に就職してからは「それでは人との関わりが持てない」「人間関係は成り立たない」と鍛えられているように感じます。

嬉泉に就職して1年目、以前の高島平五丁目福祉園にて、利用者の方とリーダーの職員の関わりから、今まで自分の中に感じたことがなかったような「人に理解され見守られている心地よさ」を感じました。2年目には利用者の方が率直に自分の気持ちをぶつけ、それを受けとめられていると感じられると、今までの構えがなくなり、率直なありのままの自分を表現し、てくることを目の当たりにすることができました。

そして、3年目、子どもの生活

研究所に転動になり、子どもと過ごす楽しさを感じつつも、私自身のことと言えば、先輩の職員から「何を考えているのか良く分からない」と言われ、そこから本当に自分との戦いが始まったように思います。「そうかな?」「何で分らないといけないのかな」と思っただけもありました。しかし実際に子どもと関わろうとした時に、真剣に向かい合おうとすればする程、今までになく、自分の中に様々な感情がフツフツと沸いてきました。そして、そのことを振り返り、自分の気持ちを率直に表現しながらスーパージョンを受けていくと、今度は自分の弱さを改めて知り、新たな課題に気がつきます。この繰り返しと積み重ねで1年はあっという間で、もう4年…5年目…8年目になってしまいました。

今は、何気ない時に「泉さんはやさしいから大丈夫よ…」と言われると、『自分をしっかり持つこと、自分の考えをはっきり人に伝えること』という課題が蘇り、『まだまだだな』と自分を戒めています。

(めばえ学園 泉 康子)

宿泊活動間近に思うこと

近々、私が所属する重度の肢体不自由の方十名と二泊三日の宿泊にでかけるので、現在、その宿泊に關しての準備に追われています。でも、この宿泊の準備がなかなか思うように進まず頭を痛めています。

まず、車椅子の方が過ごしやすく、介助者に負担の掛からないような、設備の整った宿泊施設が少ないこと。なんとか車椅子の方が利用できる宿泊施設を見つけられなくても、予算的に難しかったり、宿泊施設側がこちらのニーズに対して柔軟に対応してくれない場合があるなど、毎年、準備段階の初めから頭を痛めています。

さらに、宿泊するにあたって利用者が体調を崩さず、快適に過ごせるような細かな配慮があります。排泄・食事・入浴等々、全ての点で利用者個々にあった介助を行う上での環境を作り上げなければならず、様々な介助用品の持ち込み・工夫が必要となります。このことに関しても職員間で何度も話し合いを持ち、考えていきます。

ここまでくると、『あー、細か

な準備を必要とせず、宿泊できる場所がないものか』『もう少し障害を持った方のことを考えてくれないものか』と、本気で考え始めるのです。しかし、そうばかりは言っていられないので、着々と準備は進めていきます。

このように毎年とっていいほど、この宿泊活動の期間に入ると準備段階で頭を痛めるなか、障害を持った方が一般社会で生活していく困難を感じるのです。

この宿泊活動を通して、一般社会の現実を目の当たりにするなかで、利用者にとって何が必要なのか再確認する機会にしています。そして同時に、私たちはこの宿泊のためだけでなく、利用者の将来を考え、どのような場所でも自分の生活が守られ、安心して生活を行っていくるように、利用者の日常生活面での自立を目指し、援助しています。

障害を持った方が社会に近付くための努力に見合った分、社会も歩み寄ってくれないものかと思ひます。

(赤塚福祉園 坂田 朗)

怖い人と仕事に厳しい人

嬉泉に就職して4年目。私は「うるさい女の子」から「うるさくて怖い人」に変わったらしい。「そう思われても仕方ないだろうな。」というのが私の感想で、とても傷つきながらも納得している。

私はどうも、はっきりと物を言ってしまうことが多いらしい。嫌なもの嫌なもの好き。嫌なもの嫌なもの好き。嫌なもの嫌なもの好き。

責任を持って仕事をするうえで、一緒に仕事をする職員にはっきりと物を伝えるということは必要なことと考えているからなのだが、それを受け入れてくれる職員があまりいないのも事実なのだ。

一時期、あまりに「怖い人」と言われるので悩み、はっきりと言うことを控えようとしたことがあった。そのことを先輩職員に話すと、「周りの人の目なんて気にするんじゃないよ。はっきりと伝えていかないと何も変わらないよ」と随分説得力のある言い方でアドバイスしてくれたことがあった。実はその先輩職員も「怖い」と思われて

しまう人なのだが。

「怖い」は、はっきりと物を言う私だけではなく、仕事中は怖い顔をしている職員、仕事をきちんとしていない職員には怖い職員、観察眼のするどい職員もそう言われてしまうのだ。私はそういう職員を怖いとはあまり思わないけれど、むしろ「仕事に厳しい人」と思うけれど……。

そうか。「怖い」と思っている職員の方が、きちんと仕事をしていないのではないか。何か後ろ暗い所があるのではないか。それが見透かされているようで、「怖い」のではないか。

事実、この原稿の締切りを守らず、担当者からの電話を受けた私は「怖いよー」と震え上がってしまった。自分がしっかりと期限を守らない方が悪いのに……。

今回のことを大いに反省しつつ、他の職員だけに思われるのではなく、自分でも自分を「怖い」と思うような仕事をしていこう。できれば、「怖い人」から「仕事に厳しい人」と言われることを目標に……。

(袖ヶ浦ひかりの学園 三條麻衣)

嬉泉に就職して……

嬉泉に就職して半年近く。こんなにも月日がたつのを早く感じたことは今までになかったかも知れません。

自閉症のことは大学の講義である程度勉強していて興味はあったものの、実際に自閉症の人に会ったのは、嬉泉での就職実習が初めてだった私。就職してから毎日が勉強の日々でした。

利用者の気持ちを考えながら援助する、ということとは頭の中では理解できていたはずのことでしたが、いざそれを実行に移すととなるととても難しいことだと感じました。というのは、自分では利用者の気持ちを察していたつもりでも、本当はそうではなかった、ということが何回もあったからです。

例えば、作業場面で、今まで他に向いていた気持ちを自分なりに整理してから参加しようとしている利用者に對して、私はそういう気持ちの動きが分からずに、逆に行動をせかしてしまうこともあり、説明されるまで気付かなかったり、スリーパーサイズをうけるたびに、

指導員としての私は何て空っぽなんだろう、と無力感に襲われたこともありました。最近やっとそんな自分を認め、「中身が空っぽなら、これから一杯になるように少しずつでも努力していけばいい」と思えるようになったところです。

そんな未熟な私も、趣味でアクセサリーを作っていたことがきっかけで、おおらか学園ではビーズ活動の担当をしています。作業の素材はおもちゃのビーズだったり、本物のビーズだったり、私が作った図案で作品を作る人もいれば、自分の思うように作る人もいたり、利用者によって作業の形態や目的はまちまちです。

また、利用者の中には作った物をバザーで売ることを楽しみにしている人達もいます。

「これバザーで売るのは?」「どのお母さんが買ってくれるかな?」といったながら、目をこらして小さなビーズを懸命に通している姿を見ると、デザイン画がうまくかきなくて途中で投げ出したくなる私を恥ずかしく思います。私も彼らに負けないくらい頑張ろう、と思う今日この頃です。

(おおらか学園 山田 恵)

嬉泉の出来事

国家公務員初任者研修

赤塚福祉園では、人事院公務員研修所からの依頼により初任者行政研修の一環として「ボランティア体験研修」を毎年受け入れてきている。今年は、金融監督庁・厚生省・建設省・通商産業省・科学技術庁から優秀な若者たちがやってきた。

この研修は私たちも毎年楽しみにしている。というのも、毎年たった5日間の研修にも関わらず、職員たちには大いに参考になる明快で率直な意見をさまざまな角度から述べてくれるからである。さすがに国家公務員の上級試験を通じてきている若者たちだけのことはあって、頭脳明晰であり、プライドも高く、国の将来へのビジョンを常に意識している。

われわれとしては、国の将来を担って行くであろう人材に、ありのままの障害者の生活と施設の実態を経験してもらい、家族や学校

や地域社会あるいは行政の実情も伝えたり体験することを通して、これからの国のあり様を考えていってもらいたいと望むわけである。

期待に違わず障害者に関わった経験が全くない若者たちが5日間の間に見る見る変わっていく。

といってもこの期間に通常とは異なる特別の活動を行うわけではない。時期的にたまたま「社会見学」という行事にぶつかるので、グループ毎の利用者と一緒に一日がかりの社会体験をすることも彼らには大きな刺激になる。

以下レポートからほんの一部を抜粋して感想と意見を紹介する。
・福祉は人が何よりの資本であることを実感した。

・障害者の方と接することのなかった私の見方が180度変わった。
・行政は、施設は利用者の自己実現の場であり、利用者を預けておくためのだけの所ではないとの認識を強く持つべきである。
・社会見学では、初めて「障害者」

の立場で他人の冷たい視線を浴びるという経験をした。

・利用者と一般の人との垣根を除去することにも行政はコミットすべき。

夏祭りにはボランティアでそろって応援に駆けつけてくれた。

(赤塚福祉園 友田 篤)

第十七回

自閉症実践療育セミナー報告

去る八月二十二日(二十四日、全社協・灘尾ホールにて第十七回自閉症実践療育セミナーが開催されました。今回の総合テーマは、「自閉症臨床と人間性重視の療育」で、受講者は三百名を超え盛況でした。

まず、二十二日には、山崎晃資講師の講義「発達障害の医学とA/DHD・精神医学的合併症」と、「TEACCHを理解する療育の共有」のテーマでシンポジウムが行われました。山崎先生は分かり易く現在の基本的な研究の概要を話されました。そして、シンポジウムは、受容的交流療法及びTEACCHプログラムを取り入れた療育に関し双方から、理論と実践が話されました。我国で初めて、それぞれの立場からの療育の

話題提供に加え、お互いの立場の理解を深めるという視点で意見交換が行われました。

第二日の二十三日には、石井哲夫講師の講義「関係療育論(心のケアと癒し)」と、「施設現場における療育の創造」のテーマで実践講座が行われました。療育現場のVTR、事例などを引用しながら、より実践に即した形での講座となりました。

最終の二十四日には、ゲストスピーカーである村上和雄講師の特別講義「輝いて生きる―あなたの遺伝子がめざめるとき―」の話がありました。ここでは現在注目されている遺伝子に関し、生きている人間の心との接点に触れる貴重な話があり、多くの受講者の感銘を深めました。また、「私の療育」というテーマでシンポジウムが行われました。ここでは、施設職員、教員の立場に加え、親の立場からも話題を提供して自閉症療育への興味を湧かせました。

この三日間を通して、フロアーの受講生の方からは様々な意見や質問が出され、大変活発な議論がなされました。関係者への御協力に心から感謝の意を表したいと思います。

(セミナー事務局 稲嶺 裕子)

アトリエAUTOS作品展 『SIIX SENSES』

テレビドラマの役作りのために袖ヶ浦ひかりの学園を訪れた藤井フミヤさんに、アトリエAUTOSの作品展のお願いをしたのは、市内を巡回してのびろパンを一緒に販売した車中でした。アトリエAUTOSの人たちの作品を同じアーティストとして高く評価して下さり、『SHOWCASE2000-2001』と題したフミヤさんの企画（来年の5月まで8種類のプログラムを開催）のプログラムの2番目として、広尾にあるフミヤさんがプロデュースする『FUMIYART GALLERY』で作品展をやるという、夢のような話が実現したわけです。

展示タイトル『SIIX SENSES』として、8月22日から9月10日までの3週間に2000人の方が、全国各地から来て下さいました。80%が20代の女性でフミヤさんのファンの方々でした。テレビのやじ馬ワイドで紹介されましたし、東京新聞では紙面の大半を使い、大きく取り上げられましたので、この影響も大きかったと思います。

今回、初めて絵を売ることになりました。アーティストである日比野克彦さんはじめ多くの方に購入頂き、57枚中、22枚が売れました。また、値段の折り合いがつけば購入したいという人が沢山いました。作品集が49冊、ポストカードが1500枚以上売れたことがそれを物語っていると思います。

多くの方にアンケートの協力を頂きましたが、一番多かったのが「色が綺麗」「常識に囚われず、思いもつかない自由な発想でのびのびと描いている」でした。また「障害者に対する偏見を反省させられた」「不思議な気持ちになれ、癒された、元気をもらえた」「絵を描くことをやめていたがまた描く気持ちになった」「障害者に関わっている方々からの「療育の中に芸術を取り入れる決心をした」などを見るにつけ、「SIIX SENSES」のもつ力を改めてすごいと思わざるを得ませんでした。

この機会を与えて下さった藤井フミヤさんに、またプロデュースして下さいた田辺良太さん、フミヤさんの事務所の方々に改めて心から感謝致します。

（袖ヶ浦ひかりの学園 戸屋 隆）

認可保育所「すこやか園」に 求められるもの

乳幼児保育は、自閉症療育と並んで本法人嬉泉発足以来、大切な仕事となっています。昭和40年法人の発足と同時に開設された幼稚園類似施設「すこやか学園」と、昭和58年開設された無認可保育室「子どものへや」を合併し、この度の子どもの生活研究所の改築にともない、新たに認可保育所「すこやか園」がスタートしました。

「すこやか園」は、保護者の就労等の様々な条件によって家庭での保育に欠ける、生後2ヶ月から6歳までの就学前の乳幼児を対象とした、定員36名（0歳児5歳児まで各6名ずつ）の小さな保育園です。その保育は石井所長の提唱する「受容的交流理論」に基づき、また平成12年度に新たに改定された「新保育所保育指針」に沿って、一人一人の子どもの「個性」を大切に、その成長に合わせて、すこやかな「自我」の発達を援助することを目標としています。

また、小規模な保育所の特性を生かし、場面に応じて年齢別保育、縦割り保育を適宜組み入れ、多様な人間関係を体験出来るよう工夫しており、障害を持つお子さんも

積極的に受け入れています。

もう一つの大きな役割は、保護者との関わりです。子ども達は0歳から小学校就学までという、人生の出発点であり、またその人格形成上、最も重要な時期を、この「すこやか園」で過ごすわけであり、家庭との連携は欠かすことはできません。家庭での養育の補完というだけでなく、共に協力し合い、「一緒に育てていく」という姿勢が必要だと考えています。また現在通園されているお子さんのみでなく、地域で子育てに悩んでおられるお母さん達のより相談相手になることも求められています。

このように少子化の傾向に歯止めのかからない状況の中で、保育所に求められる課題は大きいものがありますが、その鍵となるのは保育士の資質であり、その研修であると考えています。保育士はまず子どもと良い人間関係を作ることが必要ですが、そのためには保育士自身が、自立した、健全な精神の持ち主でなければなりません。そのために常に自分を高めていくとする意欲と、それを助けるスーパービジョン体制が不可欠であると考えています。

（すこやか園 島野雅子）

ひかりのタイムス

独立第38号

私、山岸は、一九八五年から一九九九年一月まで、ひかりの学園に在籍していた時『ひかりのタイムス』編集長をやっていました。一九九九年一月から「グループホーム・春のひかり」に移った為、編集長をやめました。

この度、石井先生の指示で「グループホーム・春のひかり支局長」を命じられて、『ひかりのタイムス』から要請があれば寄稿することになりました。よろしくお願いします。また、他の住人も寄稿する事になると思います。

『ひかりのタイムス』は「袖ヶ浦ひかりの学園」利用者や、「グループホーム」の住人が本人発言する場です。

彼等なりの自己主張をすると思います。表現が人にわかりにくいと思います。それらをひっくり返して、自閉症の人の投稿の場にしていきたいと思っています。よろしくお願いします。

(グループホーム・春のひかり 山岸 裕)

『ひかりのタイムス』に「声援を

袖ヶ浦ひかりの学園あゆみグループに籍をおいていた山岸裕さんが編集長を引き受け、自分たちで企画して編集方針を立て、広く原稿を求めながら紙面を作っていくという本格的な新聞を目指した『ひかりのタイムス』(独立号)は、今年で十三年目を迎えています。

その間、山岸さんが地域の企業に就職して忙しくなったり、地域のグループホーム・春のひかりに移ったりして、これまで通りのやり方を続けていくことが難しくなりました。幸い、山岸さんは「支局長」としてかかわってくれることになり、新たな紙面作りの段階に入りました。

十数年という年月はいろいろな

ものを変え、凄いいスピードで駆け抜けて行きました。しかし、これからも利用者のための『ひかりのタイムス』は続きます。二十一世紀もどうぞ変わらぬご声援をお願いします！

ひかりのタイムスアドバイザー

一尾 弘志

「アトリエ・AUTOS」

作家へのインタビュー

(聞き手…一尾)

平成十二年八月二十二日～九月十日、アトリエ・AUTOSの作家六人の作品展、SHOWCASE 2000012001「SIX SENSES」が東京広尾のFUMIYART GALLERYで開催されました。作品展の感想など、袖ヶ浦ひかりの学園の市川浩志さんに聞きました。

「『シックスセンス』のオープニングパーティーはどうでしたか？」

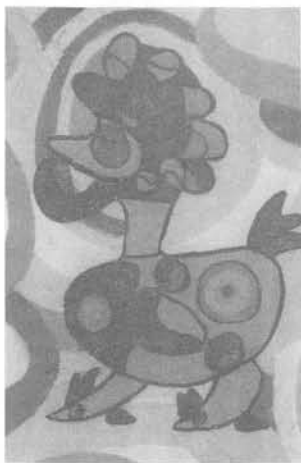
「よかった。」

「楽しかった。」

「須藤理事長に会えてよかった。」

「ワインが飲めたしお菓子も食べれた。」

「よかったよ。」



鶴岡八幡宮の狛犬をイメージした市川浩志さんの作品

— 『狛犬アラジン』 —

「藤井フミヤさんの作品からイメージした絵画、陶芸作品がありましたね。」

「(創作が) おもしろかったよ。」

「市川さんの絵も売れましたよ。」

「すごいじゃん。」「いくらもらえ

るかな。」

「アウトスに望むことは？」

「アウトスの旅行が楽しみ。」

「5月、戸屋さんとアウトスのメンバーと鎌倉に旅行して、鎌倉の大仏をイメージした陶芸、絵画作品(鎌倉シリーズ)が生まれまし

たね。」

「うん。今度は、八景島に行きたい。」

「旅行での体験、見た物などが創作の参考になるんですね。また、イメージがわきそうですか？」

「できそう。」「旅行が楽しみ。」

「今後も、アトリエ・AUTOSの活躍を期待します！」